

広報みつ

○大腸内視鏡のはなし

No. 491 1992年7月号：医師からの提言シリーズ①

Iさん五十九歳は、会社の検診で「便潜血陽性のため精密検査が必要」と言われ、M病院に行きました。「大腸に病気があるかもしれないので、大腸の内視鏡（カメラ）の検査をしましょう。腸の中の様子がよくわかります。」ということで、Iさんは検査の予約をして帰りました。



公立御津病院 内科
北村 嘉章 先生

検査の日がきました。渡されていた下剤を朝早くから飲みました。トイレに行ったり来たりが続き、最後には水のような便になってしまいました。昼ごろにはどうやら落ち着き、病院に行きました。

台の上に横になって検査が始まりました。おしりから内視鏡の管が入ってきて、中でぐるぐると動くのがわかります。少々痛みもありましたが我慢できないほどでもありませんでした。検査は三十分ほどで終わりました。一センチぐらいのポリープがあります。良性のようですが、取った方がよろしいです。手術をしなくても内視鏡でポリープを切り取れます。入院が必要ですので日を改めて検査しましょう。」と、医者から説明を受けました。Iさんはやはり心配になりました。「癌ではないのだろうか、本当に良性なのだろうか、ポリープを切るのは恐くないのだろうか。」そんなことが頭からはなれません。

二回目の検査です。今度は入院していますが、前の検査と全く同じでした。検査が始まってしばらくすると、「今からポリープを切ります」と言われ、五秒ほどしてから「終わりました」と言われました。痛みもまったく感じませんでしたし、怖いと思う時間ありませんでした。切ったポリープを見せてもらおうと、ちょうど小指ほどの大きさでした。Iさんは数日後に退院しました。

二週間ほどしてから、M病院に検査の結果を聞きに行ったIさんはびっくりさせられました。「ポリープはほとんどのところが良性でしたけれど、ほんの一部のところに悪性の細胞がみられました。ポリープは切り取りましたので、すでに治っています。手術も必要ありません。」と言われました。Iさんは大腸癌だったのです。ところが早期に発見されたため、手術もせずに治ってしまったのでした。怖いような、ほっとしたような気分です。三ヵ月後に再検査を受けましたが異常はありませんでした。検査が終わってしばらくはなんとなく不安な日を送っていたIさんも、最近ではようやく気分がおちついてきました。

— — — — —

私たち日本人の食生活は、最近数十年間で大きく変わり、それにつれて病気

も欧米と同じような傾向になってきています。ここ三十年間ほどで胃癌の死亡率はほぼ半分になったのに対し、大腸癌は約三倍となっています。胃癌の検診はかなり普及してきて、胃の内視鏡検査を受けた経験のある人が増えてきています。最近、大腸内視鏡の検査が、多くの病院で行えるようになってきました。Iさんのように便検査で異常があった人や、おなかの症状がある人だけではなく、どうもない人でも検診として検査を受けることが勧められてきています。

大腸の内視鏡検査を行うと、ポリープが見つかることが多く、日本人では十から二十パーセントの人にみられます。食生活の変化と内視鏡検査の発達により、この数字は今後増えるものと考えられます。

ポリープというのは「良性のできもの」のことで、癌とは別のものです。大きさは米粒ぐらいのものから数センチになるものまであります。大腸にポリープが見つかる、すべて取るようにしています。なぜなら、目でみて良性であっても顕微鏡で詳しく調べると、数パーセントに小さな癌が見つかるからです。Iさんのように内視鏡を使って電気メスで切りますので痛みもなく、出血もほとんどありません。もちろん、この時点で進行した癌が見つかったり、ある程度の大きさ以上のポリープであれば手術が必要となります。切り取ったポリープを調べて、もし癌が見つかったとしても、ポリープを根こそぎ取っていますので、それ以上手術の必要はなく治療は終了します。ただし、定期的な大腸の検査は必要となります。

Iさんの話は経過のよかった例ですが、このようなことはそれほど珍しいことではありません。最近、大腸の病気、特に大腸癌に対する関心が高まってきて、大腸の病気を心配して自分から希望して検査を受けにくる人が増えてきています。そのような人の中にもIさんのような例がときどき見られます。みなさんも機会があれば、ぜひ大腸の内視鏡検査を受けるようにしてみてください。